



去る6月2～6日、パリのOECD（経済協力開発機構）本部で、世界食料需給見通し関連の一連の会議があり、これらの会議に出席した。その後、9～16日にかけて、イタリア北部の稲作地帯、ローマのFAO（国連食糧農業機関）本部、ブラッセルのEU（欧州連合）委員会を訪問し、EUにおけるコメ事情に関する調査を行った。

まず、6月2～3日にかけて、World Outlook Conference が開催された。この会議は、FAPRI（米ミズーリ大学・アイオワ州立大学食料・農業政策研究所）が主催するもので、毎年、世界の国際機関や研究所の主にモデルを使用した食料・農業見通しの担当者が世界のどこかに集まり、それぞれの見通しを持ち寄り、相互に報告したり、批評し合ったりすることを目的としている。モデル全般、および砂糖や綿の需給モデルなどについての報告と討論が行われ、日本からはJIRCAS（国際農林水産業研究センター）の古家淳氏が、環境・地球温暖化問題とモデルとの連携に関する報告を行った。

4日はOECD AGLINK user group 会議に出席した。AGLINK モデルとは、OECD が加盟国との協力の下に開発した中期の世界食料需給予測のための部分均衡モデルであり、加盟国も、カナダ等が、毎年このAGLINK モデルを使用したOECDの世界農産物中期見通し「OECD Agricultural Outlook」を利用して、自国の需給見通しに活用している。この会議では、予算削減等の影響から、毎年公表されていたOutlookが、2004年からは2年に1度の公表にせざるを得ない事、ブラジルが新たに国別モジュールとして加わった事、砂糖モ

デルの開発を進めている事、AGLINK モデルを動かすソフトウェアが完全にWINDOWSに対応したTROLLになった事等の報告があり、これらについての議論が行われた。5～6日は、引き続き、各国のAGLINK 担当者に対し、TROLL に移植されたAGLINK モデルの動かし方につき、PC を使って実際にAGLINK モデルの扱い方を習得するための研修会議に参加した。

次週の6月9日は、イタリア北部、ミラノ近郊の稲作地帯であるパビア市のAIRI（イタリア精米業者協会）を訪問し、アルプスからの雪解け水が流れ込むポー河流域に発達した灌漑稲作農業の概要を聴取した。10～12日にかけて、AIRI 本部、近郊の稲作農家、精米工場、米生産者組合、国立稲研究所、灌漑水路管理会社等を訪問し、イタリアにおける稲作やコメ事情について、インタビューを実施した。この地帯のコメはリゾット用の大粒のものが大部分であり、また、農家は完全に機械化されており、1農場当たり100haを越える大規模農家も存在する。また、EU 統合の結果、人・物・サービスの流通が活発になり、ヨーロッパ北部でもコメの消費が増えつつある。また、コメの流通は、農協のような組織的な集荷体制にはなっておらず、仲買業者が介在し、価格は近郊にある数カ所の取引所で決定されるところであった。6月13日にはローマのFAO 本部を訪れ、コメの専門家と会談し、EU およびイタリアにおけるコメの実情や政策の動向の把握、コメの国際市場の動向につき聴取を行った。

引き続き、6月16日にはブラッセルのEU 委員会のコメ政策担当者を訪問した。丁度この時期、EU では、2003 / 2004 農業年度におけるCAP（EU 共通農業政策）の改革案を審議している最中であり、午後1時間程度の短い対談にならざるを得なかったが、EU におけるコメ関係のデータベースを入手するためには、実際はルクセンブルグにあるEUROSTAT（欧州連合統計局）にコンタクトを取る必要がある事や、EU における政策の形成過程、EU と日本における精米換算率の相違等に関し聴取を行うことができた。